

## 臨床行動分析を用いた精神看護の臨床判断を体験しよう

○加藤 宏公<sup>1)</sup>、柳澤 博紀<sup>2)</sup>、大瀧 明子<sup>3)</sup>、西田 祐紀<sup>4)</sup>、兒玉 善明<sup>1)</sup>、中井 理賀<sup>1)</sup>

1) 愛知県立大学 看護学部、2) 医療法人桜桂会 犬山病院 心理室、3) 滋賀県立精神医療センター 看護部、  
4) 三重大学 医学部医学・看護学教育センター

### 【背景と目的】

精神看護の臨床判断においては、精神疾患を経験した人の回復の道程における継続的なプロセスをアセスメントする視点が必要です。例えば、患者さんのリカバリーのプロセス、依存や強迫症状などの悪習慣のプロセスなど、さらには、患者さんとの信頼関係の構築プロセスなども考えられます。これらの視点は、精神看護の日々の臨床で必ず意識されているものであり、特に精神看護で特徴的な視点であると思います。

しかし、通常の看護過程のアセスメントにおいては、横断的に今、現在の状況を包括的に捉え、看護過程（アセスメント・看護診断・計画・介入・評価）のサイクルによってなされるため、上記のような縦断的に継続的なプロセスをアセスメントする視点は、経験的な臨床判断となっているのではないのでしょうか。そのため、本ワークショップでは、継続的なプロセスをアセスメントする方法として、臨床行動分析の機能的アセスメントを紹介し体験してもらうこと、精神看護の臨床判断をより明確にすることを目的としています。

### 【方法】

臨床行動分析を用いたこのワークショップは、本学会において、これまでに3回開催し、精神疾患を抱える当事者のリカバリーの継続的なプロセスを支援するために、臨床行動分析の機能的アセスメントと支援法(アクセプタンス&コミットメント・トレーニング：以下、ACT)を紹介してきました。これまで、ACTを体験してもらうことを主軸としておりましたが、参加者の皆さまからの要望からも、今回は、機能的アセスメントを用いた事例検討をグループワークにより体験してもらい、継続的なプロセスを臨床判断する際の有用性や精神看護における可能性について、参加者の皆さんと交流したいと思います。

### 【内容】

臨床行動分析における機能的アセスメントとは、なぜその行動や習慣が強化されているのかを、行動の前後を捉えた3つ（先行刺激・行動・結果）のプロセスからアセスメントします。このアセスメント法は、行動分析学を基盤としており、行動の前後のプロセスを観察することによって、人間を含む動物すべての行動の原理から、その機能をアセスメントすることができます。さらに人間のみが用いる言語行動をも分析できるようになったものが臨床行動分析であり、成人臨床で用いることができます。この動物の中でも人間特有の言語行動による悪循環のプロセスに着目し、その支援法としてまとめられているものがACTです。

臨床行動分析で扱う成人臨床の具体的な行動問題とは、例えば、「どうせ自分にはできない」といった言語行動の“先行刺激”によって、実際にはやるべき“行動”が回避されている場合に、その“結果”として、より一層「自分にはできない」思いが確かなものとなり、やるべき行動を回避するという機能が強化されていく、というプロセスを辿ります。このように誰もが体験する言語行動の悪循環を、臨床行動分析では機能としてアセスメントすることによって、行動習慣を支援することが可能となります。それでは、皆さまと交流できることを楽しみにしております。

### 【倫理的配慮】

本ワークショップ内で話し合われる内容は守秘義務を伴うものとし、参加者の個人情報およびプライバシーの保護に十分留意いたします。また企画者らは、ワークショップ自体が安全な場として機能するように配慮して進行させていただきます。

### 【利益相反】

開示すべき利益相反はありません。